

「旧約の信仰者たちの手本」 ダビデ (11:32~34)

手本となる生き方	信仰者と (関連箇所)	箇所	
試練の中で、信仰による <u>勇氣</u> を発揮した	イスラエル国史に見る信仰 (士師たち・王たち・預言者たち) 士師たち : ギデオン、バラク、サムソン、エフタ 王たち : <u>ダビデ</u> 預言者たち : サムエル	32~34	
国家的勝利を得た	国々を征服した	ヨシュア、士師たち、 <u>ダビデ</u>	33
	正しいことを行った	<u>ダビデ</u> 、サムエル	
	約束のものを得た	ギデオン、バラク、 <u>ダビデ</u>	
個人的救出を体験した	獅子の口をふさいだ	ダニエル、サムソン、 <u>ダビデ</u>	34
	火の勢いを消した	ダニエルの3人の同僚たち	
	剣の刃をのがれた	モーセ、エリヤ、エリシャ、エフタ、 <u>ダビデ</u>	
個人的な賜物を発揮した	弱い者なのに強く	ギデオン、サムソン、 <u>ダビデ</u>	
	戦いの勇士となり	ヨシュア、バラク、 <u>ダビデ</u>	
	他国の陣営を陥れた	<u>ダビデ</u> 、ヨシャパテ	
信仰は <u>死を乗り越える</u>	<u>女たちは</u> 死んだ者をよみがえらせてもらった 【I列17:8~24、II列4:8~37、ルカ7:11~17、ヨハネ11:1~44】 (これに対して) <u>ほかの人たちは</u> 、 <u>さらにすぐれたよみがえり</u> を得るために、釈放されることを願わないで・・・	35~38	
ほかの人々は、死に至るまでの信仰を示した	あざけられ、むちで打たれ	エレミヤ エレ20:2	36
	鎖につながれ、牢に入れられる	ヨセフ	
	石で打たれ	ゼカリヤ II歴24:20~22	37
	のこぎりで引かれ	イザヤ	
	試みを受け	ヨセフ	
	剣で殺され	ウリヤ IIサム11:14~25、12:9	
	羊とやぎの皮を着て歩き回り	エリヤ II列1:8	
	乏しくなり悩まされ苦しめられ	預言者たち	
	荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよった	オバデヤ I列18:3~6	38
	この世は、彼らにふさわしい所ではなかった		

## ■はじめに

## 1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

## 2. 手紙の内容と11章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。時代を追って、
  - ① 族長時代以前：アベル、エノク、ノア
  - ② 族長たちの時代：アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ
  - ③ 出エジプトから荒野の旅：モーセの両親、モーセ、イスラエルの人々、ラハブ
  - ④ 士師記の時代前期から二人の士師、ギデオンとバラク（時期的にはバラクが先）
  - ⑤ 士師記の時代後期から二人の士師、サムソンとエフタ（時期的にはエフタが先）
  - ⑥ 士師記の時代の後、王ダビデと最後の士師であり預言者であるサムエル
  - ⑦ 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた預言者たちを指している。
- (3) 前々回は「サムエル」、前回は「サムエルの晩年とダビデの登場」、今回は「ダビデ」。

## ■前回までの内容

1. サムエルは、預言者そして最後の士師である。彼の信仰の手本を一言でいえば、「信仰によって、正しいことを行った」（ヘブル11:33）である。
  - (1) 1サム12:1~5・・・サムエルがサウル王を立てたときにイスラエルの人々に語ったことば。サムエルが士師として、公正にそして自分の利益を求めずに、奉仕してきたことが確認された。
  - (2) 1サム12:23b~24・・・「よい正しい道」とは、人の目から見て正しいことではない。「ただ、主を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい」。これは、信仰によってのみ可能となる。「信仰によって、正しいことを行った」（ヘブ11:33）
2. サムエルの晩年（BC1028 - BC1020）とダビデの登場
  - (1) ペリシテ人との戦い、サウル王の失格（13:1~14:46） BC 1028頃と推定
  - (2) サウル王の努力（14:47~52）とアマレク聖絶命令に対する違反（15章）
    - ① 15:28（直訳）「引き裂いた、主は、イスラエルの王国を、あなたから、きょう。与えた、その王国を、あなたの $\square$ レヤ（兄弟、仲間、友人、夫、愛する

者、隣人)に、その者は良い、あなたよりも。」

- (3) ダビデへの油注ぎ (16:1~13)
- (4) サウルから主の霊が離れ、悪霊におびやかされる (16:14~23)
- (5) ペリシテ人ゴリアテと少年ダビデとの戦い (17章)
- (6) ダビデの登用とサウルの恐れ、ダビデはサムエルのもとへ (18章・19章)

① 18:1 (直訳)「それは、ダビデがサウルと語り終えたときであった。ヨナタンの心はダビデに結び付いた。そして彼を愛した、ヨナタンは、自分と同じほ

どに」

② 18:2 サウルはその日、ダビデを召しかかえ、父の家に帰らせなかった。

③ 18:3~4 ヨナタンは、自分と同じほどにダビデを愛したので、ダビデと契約を結んだ。ヨナタンは、着ていた上着を脱いで、それをダビデに与え、自分のよろいかぶと、さらに剣、弓、帯までも彼に与えた。

④ 18:7~8 女たちの歌「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った」、サウルは、このことばを聞いて、非常に怒り、不満に思って・・・

⑤ 18:9 その日以来、サウルはダビデを疑いの目で見えるようになった。

⑥ 18:10~11 その翌日、「わざわいをもたらす、神の霊」がサウルに激しく下り、彼は家の中で狂いわめいた。ダビデはいつものように、琴を手にして弾いたが、サウルは槍をダビデに二度投げつけ、ダビデは二度とも身をかわす。

⑦ 18:12~16 サウルはダビデを恐れ、自分のもとから離して千人隊の長とした。ダビデが大勝利を収めるのを見て、サウルはダビデを恐れた。

⑧ 18:17~30 そこで、サウルは、1回目は上の娘メラブ、2回目は下の娘ミカルを妻として与えることを条件に、ダビデをペリシテ人との戦場に向かわせ、戦死をねらう。結果として、ダビデは2回とも成功し、サウルは娘ミカルを妻としてダビデに与えた。サウルは主がダビデとともにおられることを見、また知って、ますますダビデを恐れた。

⑨ 19:1~8 サウルは、ダビデを殺すことを息子ヨナタンや家来の全部に告げた。ヨナタンはダビデを隠し、父にとりなす。サウルは聞き入れて、誓った。

「主は生きておられる。あれは殺されることはない」。ヨナタンはダビデをサウルのところに連れて行ったので、ダビデは以前のようにサウルに仕えることになった。そのあと、また戦いが起きて、ダビデはペリシテ人を撃退する。

⑩ 19:9~17 ダビデが戦功をあげるのを見たサウルに、また、「わざわいをもたらす主の霊」が臨む。ある夜、サウルは自分の家において、ダビデは琴を手にしてひいていた。サウルは槍でダビデを壁に突き刺そうとする。ダビデは自宅に逃げるが、サウルの使者(刺客)は自宅を見張り、朝になってからダビデを殺そうとした。妻ミカルは、窓からダビデを下ろして逃がす。

⑪ 19:18~24 ダビデは、ラマのサムエルのところに行き、サウルが自分にしたこと一切をサムエルに話した。そしてサムエルと、ナヨテに行って住んだ。

● 1歴9:22 「ダビデと予見者サムエルが彼ら(レビ族)の職責を定めたのである」 → P.7「ダビデの賛美礼拝とサムエルとの関係」

- (7) ダビデはサウルの子ヨナタンのもとへ、ヨナタンとの別れ (20章)

- (8) ダビデの逃亡、ノブ (祭司の町) → ガテ (ペリシテ人の町)、狂人を装う (21 章)
- ① 11 節 ガテでは、アキシュ王の家来たちがダビデを疑った。「あの国の王ではないか。『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った』と歌われたのは、この人だ。」
- (9) アドラムのほら穴 → モアブのミツパ (両親を預ける) → ユダの地・ハレテの森、サウルはノブの祭司たちを虐殺、祭司エブヤタルがダビデのもとへ (22 章)
- ① 1〜2 節 ダビデはガテから去って、アドラムのほら穴に避難した。彼の兄弟たちや、彼の父の家のみなの者が、これを聞いて、そのダビデのところを下って来た。また、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところに集まって来たので、ダビデは彼らの長となった。こうして、約 4 百人の者が彼といえるようになった。
- (10) ケイラ救援、しかしサウルの追手がかかり、ケイラを出て、ジフの荒野へ「仕切りの岩」の出来事、さらにエン・ゲディの要害へ (23 章)
- ① 13 節 ダビデとその部下 およそ 6 百人はすぐに、ケイラから出て行き、そこごと、さまよった。ダビデがケイラからののがれたことがサウルに告げられると、サウルは討伐をやめた。
- ② 14 節 ダビデは荒野や要害に宿ったり、ジフの荒野の山地に宿ったりした。サウルはいつもダビデを追ったが、神はダビデをサウルの手に渡さなかった。
- ③ 15 節 ダビデがジフの荒野のホレシュにいたとき、サウルがダビデのいのちをねらって出てきた。ダビデは恐れていた。
- ④ 16〜18 節 ジフの荒野のホレシュにて：ヨナタンが来てダビデを、神の御名によって力づけた。「恐れることはありません。私の父サウルの手があなたの身に及ぶことはないからです。あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう。私の父サウルもまた、そうなることを確かに知っているのです。」 こうして、ふたりは主の前で契約を結んだ
- (11) サウルがダビデを追ってエン・ゲディの荒野へ「上着のすそ」、サウルとダビデの約束 (24 章)
- (12) 25:1 BC1020 サムエルの死、ダビデ【20 歳】はラマを弔問し、パランの荒野へサムエル死亡時の年齢は不明。70 歳と仮定すると、生まれは BC1090、乳離れしてシロに来たのは BC1089。エフタの娘がシロに来たのは、BC1087、サムエルが 3 歳の頃となる。

■本日の内容 ダビデ ① 20 歳から 30 歳まで (BC1020 ~ 1010)

1. ダビデ 20 歳、パランの荒野へ。アビガイルとの出会いと結婚 (25 章)
  - (1) 28〜31 節 アビガイルを通して語られた主のみこころ
2. ジフの荒野「槍と水差し」(26 章)
  - (1) 12 節 主がサウルたちを深い眠りに陥れる
  - (2) 8〜11 節 しかし、ダビデはサウルを殺さなかった

3. ペリシテ人の王（ガテの王アキシユ）に身を寄せ、ツイゲラクを拠点とする（27章）
- (1) 1節 ダビデは心の中で言った。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるであろう・・・」
- ① 26:23~24のダビデの確信「主は私のいのちを大切にしてください。すべての苦しみから私を救い出してください。」は、どこにいったのか？
  - ② これまでに2回、サウルを殺す機会があったが、ダビデはそれをしなかった。しかし、サウルはダビデをイスラエルの領土内でくまなく探し続けた。
  - ③ 26:10「主はかならずサウルを打たれる。彼はその生涯の終わりに死ぬか、戦いに下ったときに滅ぼされるかだ」とダビデは信じてきた。しかし、この時期に、逃避行の生活が10年を超える。預言者サムエルが死んでからは8年、ダビデが不安になるのも自然である。
  - ④ 伝承では、モアブの王がダビデを裏切って、保護していたダビデの両親を殺した。このことがダビデを気落ちさせたとも推定される。
- (2) 2~4節 ダビデはいっしょにいた6百人を連れて国外へ。サウルは追跡をやめる。部下たち600人については、1歴12:1~18
- (3) 5~12節 ガテの王アキシユに身を寄せ、ツイゲラクを拠点とする
- ① アキシユの所に来たのは、今回が2回目。
  - ② 前回は、1サム21:10~15。ダビデはまだ20歳にもなっていなかった。サウルから逃げてきて間もなくの頃で、アキシユの家来に疑われ、気が狂ったふりをして難をのがれた。
  - ③ 今回は、ダビデは28歳頃、前回から約10年経過、ダビデがサウル王から反逆者として追跡されていたことは、周辺諸国にもよく知られていたものと推定される。
  - ④ 5~7節 アキシユの命を狙う意図はないことを示す。
  - ⑤ 8~12節 ダビデの一行の仕事は、略奪隊。これはペリシテ人の間では普通のこと、平時は略奪、戦時は軍の中核となる部隊（13:17、14:15）。
4. ペリシテ人との戦い前夜、サウルは霊媒にサムエルの霊を呼び出すよう依頼（28章）
- (1) 3節 霊媒や口寄せ（詳しくは、福岡集会2017年5月20日「天使論：悪霊②」）
- ① 霊媒：☞ オウブ「親しい霊」という名の悪霊
  - ② 口寄せ：☞ イドデー オニィ 「ヤウダー知る」に由来。男の魔法使い。千里眼、透視能力者、超能力者を含む。
  - ③ 霊媒や口寄せは、悪霊と交信をする者たちである。
- (2) 霊媒によって死者の霊を呼び出してもらおうといっても、実のところ、霊媒にはそのような力はない。
- ① 霊媒は悪霊と交信し、オウブ「親しい霊」という名の悪霊を呼び出す。
  - ② この悪霊は、死者の生前の声や話し方をマスターしている。また、依頼者と死者の間の秘密などを、あらかじめ悪霊の組織的情報網により入手している。
  - ③ そして、霊媒の呪文を聞くと、死者の霊になりすまして、霊媒に入り、霊媒の声帯を用いて、死者そっくりの声と話し方により依頼者に親しげに語りかけ、依頼者を欺く。

- (3) 6節 サウルは主に伺ったが、主が夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても答えてくださらなかった。
- ① サウルは信仰をもって主のみこころを求めたのではない。だから、主からは何の答えもないとなると、霊媒を頼った。
- ② I歴 10:13~14には、「不信の罪」とある。
- (4) 12~13節 霊媒の女は、いつものようにオウブ「親しい霊」を呼び出そうとしたら、いつもとは全く違う情景が見えて驚愕する。こうごうしい方が地から上ってくる。同時に、自分の前にいる依頼者は、変装しているが、サウル王であると知らされる。
- ① 14~25節 サムエルの霊魂が、地から上って来て、サウルの前に現れる。そして、明日の戦いでサウルは敗れ、息子たちとともに死ぬであろうと告げる。
5. ダビデとその部下は、ガテの王アキシユの軍に従軍していたが、他のペリシテ人の領主たちの反対で、ペリシテ軍から外される (29章)
6. ダビデとその部下がツィゲラクに帰ると、アマレク人の略奪隊に襲撃された直後であった。女と子どもたちが全員連れ去られていた。ダビデたちは3日間の行程差を追跡して、奪還 (30章)
- (1) 6節 ダビデは非常に悩んだ。民がみな、自分たちの息子、娘たちのことで心を悩まし、ダビデを石で打ち殺そうと言い出したからである。しかし、ダビデは彼の神、主によって奮い立った。(部下たちの不満=このようなことになったのも、ペリシテ人の地に逃げてきたから。それというのも、リーダーのダビデが2度のチャンスがありながらサウルを殺さなかったから・・・)
7. イスラエルの敗北、3人の息子たちの戦死とサウルの自決 (31章)
8. ダビデの「弓の歌」(IIサム1章)
- (1) ダビデのもとに、サウルの陣営にいたアマレク人の若者【在留異国人】がサウルの王冠と腕輪をもって来訪 (2節、13節、10節)
- (2) アマレク人の若者の偽証 (6~10節)。本当は、戦場で自決したサウルの遺体を見つけ、王冠と腕輪をはぎ取ってきただけ。サウルの息の根を止めたとあれば、サウルに追われていたダビデは喜び、その上、王冠を渡せば、よくぞペリシテ人の手に渡さなかったとなるはず。彼はダビデから褒賞をもらえると期待した。
9. ダビデ30歳、ユダの王となる (IIサム2:1~7)
- (1) 1~3節 主に伺って、ユダ族の割り当て地の中にある町、ヘブロンへ
- (2) 4節 a ユダ族の人々がやって来て、ダビデに油を注いで「ユダの家の王」とした。
- (3) 4節 b~7節 ヤベシュ・ギルアデの人々へのメッセージ：サウルに忠誠を示した彼らを敵視せず、逆に主の祝福を祈る。
- (4) 5:4~5 ダビデは30歳で王となり、・・・ヘブロンで七年6か月、ユダを治めた。

■ダビデの賛美礼拝とサムエルとの関係 (前回の内容から)

1. I 歴 15:16~28 エルサレムに神の契約の箱を置く天幕を張り、賛美歌隊を編成
  - (1) ダビデの町に、神の箱のために場所を定め、そのための天幕を張った。
  - (2) 16 節 レビ族の者たちを十弦の琴、たて琴、シンバルなどの楽器を使う歌うたいとして立て、喜びの声をあげて歌わせるよう命じた。
2. I 歴 16:4~38
  - (1) それから、レビ人の中のある者たちを、主の箱の前で仕えさせ、イスラエルの神、主を覚えて感謝し、ほめたたえるようにした。かしらはアサフ、……。
    - ① 祭司ベナヤとヤハジエルは、ラッパを携え、常に神の契約の箱の前にいた。
    - ② その日その時、ダビデは初めてアサフとその兄弟たちを用いて、主をほめたたえた。
  - (2) I 歴 16:39~42 ギブオンに残るモーセの幕屋の前でも、賛美歌隊の奉仕
    - ① 祭司ツアドクと彼の兄弟である祭司たちを、ギブオンの高き所にある主の住まいの前におらせ、全焼のいけにえを、朝ごと、夕ごとに……
    - ② 彼らとともに、ヘマン、エドトン、その他、はっきりと名を示された者で、選ばれた者たちを置き、主をほめたたえさせた。
    - ③ ヘマンとエドトンの手には、歌う者たちのためにラッパとシンバルとがあり、また神の歌に用いる楽器があった。
3. I 歴 23:1~5 ダビデの晩年には賛美歌隊は、4千人
  - (1) 4千人は、ダビデが賛美するために作った楽器を手にして、主を賛美する者となった。……このうち、指揮者3人と歌の達人288人については、次に。
  - (2) I 歴 25:1~7
    - ① アサフの指揮下に4組、4人の息子がそれぞれの組のリーダー。
    - ② エドトンの指揮下に6組、6人の息子がそれぞれの組のリーダー。
    - ③ ヘマンの指揮下に14組、14人の息子がそれぞれの組のリーダー。
    - ④ 合計24組。各組はリーダーを含めて12人。総計288人。各組のメンバー11人は、いずれもリーダーの「子たち、兄弟たち」。
    - ⑤ アサフ、エドトン、ヘマン、彼ら及び主にささげる歌の訓練を受けた彼らの同族 — 彼らはみな達人であった — の人数は288人であった。総計291人。
  - (3) I 歴 9:22 「ダビデと予見者サムエルが彼らの職責を定めた」のである
4. 神殿の仕様書 (I 歴 28:11~19)
  - (1) 12 節 「御霊により彼 (ダビデ) が示されていたすべてのものの仕様書」
  - (2) 19 節 「私に与えられた主の手による書き物」
5. ソロモンの神殿礼拝 (II 歴 8:14)
  - (1) ソロモンは、その父ダビデの定めに従い、祭司たちの組分けを定めてその務めにつかせ、レビ人もその任務につかせ、毎日の日課として、祭司たちの前で賛美と奉仕をさせた。門衛たちも、その組分けに従って、おのおのの門に立たせた。神の人ダビデの命令がこうだったからである。
6. 詩篇は、多くがダビデの賛歌であるが、アサフ、エドトン (エタン)、ヘマンによるものもある。詩篇の表題にある「コラの子たち」とは、レビ族のコラの子孫を指し、サム

エルの孫ヘマンが指揮した 14 組である。

- (1) 詩篇 42~49 「コラの子たちのマスキール」
- (2) 詩篇 50、73~83 「アサフの賛歌」
- (3) 詩篇 87~88 「コラの子たちの賛歌」「ヘマンのマスキール」
- (4) 詩篇 89 「エタンのマスキール」